

【熱中症対策】

～予防のポイント～
高温時の作業は極力避け、日陰や風通しのよい場所で作業するとともに、できるだけ単独作業は避けましょう。また、喉の渇きを感じる前にこまめに水分・塩分補給し、熱中症対策アイテムを活用しましょう。
～熱中症が疑われる場合～
涼しい環境へ避難し、水分・塩分を補給してください。応急処置をしても症状が改善しない場合は医療機関で診療を受けましょう。

【天気予報及び概況】

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、高い確率50%です。

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)
2023年	28.0	32.5	24.6	204.0
2022年	28.5	33.2	24.9	63.0
2021年	26.7	30.7	23.5	256.0
1991～2020年	27.9	32.2	24.4	162.6

※気温については、1ヶ月の平均値(気象庁)

【作物】

1 穂肥施用時期(目安)

品 種	施用時期	肥料名・施用量
ヒノヒカリ	出穂20日前 (田植え6/5頃、穂肥8/4頃)	化成444 又は NK特11号 30kg/10a

2 水管理について

- 中干し直後：2～3回走り水を行った後に、間断灌水を行います。
- 幼穂形成期(出穂25日前)～穂ばらみ期：土壌水分が不足すると収量や品質が低下するので、水分を十分保ちます。
- 出穂期～出穂期以降：浅水管理(2～3cm)をします。異常高温が続く場合は、かけ流し灌水で地温を下げ、根傷みを防ぎます。
- 登熟期：灌水して土壌に水分を与えたら、水は溜めずに、足跡に水がたまっている程度(飽水状態)にします。
- 落水期：落水期は収穫前7日程度としますが、収穫作業に支障のない程度に刈り取り直前まで走り水灌水で土壌水分を保ちます。

3 病害虫防除について

防除時期	病害虫名	農薬名 散布濃度・使用量 使用時期
8月中旬～ 8月下旬 (出穂期前)	カメムシ類・ツマグロヨコバイ・コブノメイガ・イナゴ類・ウンカ類・紋枯病・もみ枯細菌病・いもち病・ごま葉枯病・内穎褐変病・稲こうじ病	トレボンスターフロアブル(1,000倍 収穫14日前まで) + バリダシン液剤5(1,000倍 収穫14日前まで) + ブラシフロアブル(1,000倍 収穫7日前まで) (粉剤の場合：イッカツエース粉剤DL 3～4kg/10a、穂揃期まで)
8月下旬～ (穂揃期～ 傾穂期)	カメムシ類(ウンカ類、ツマグロヨコバイにも有効)	スタークル顆粒水溶剤(2,000倍 収穫7日前まで)

- ・稲こうじ病は、前年度多発した圃場では菌密度が高いため再発の可能性があります。出穂20～15日前にドイツボルドーA2,000倍(出穂10日前まで)を予防散布してください。他剤との混用はできません。
- ・カメムシ対策として、ほ場周辺の草刈りを行ってください。出穂3週間前と出穂時に2回実施すると効果的です。乳熟期から糊熟期が最も被害が大きく、この時期に当たる出穂10～15日後に防除を実施してください。
- ・トレボンスターフロアブルとスタークル顆粒水溶剤の使用回数は、合わせて3回以内となっています。

【野菜】

1 果菜類

(1) 灌水

梅雨明け後は、適宜畝間に灌水を行います。灌水は朝夕の涼しい時間帯に行い、日中、畝間に水が溜まらないように注意してください。水が溜まっていると、溝まで伸びた根が傷み、生育が悪くなる場合があります。

(2) 追肥

生育(収穫)期間を長く保つためには収穫量に応じた追肥が必要です。常に勢いのある芽を確保するために、7～10日間隔で、窒素成分で2～3kg/10aを目安に施します。乾燥している土壌の場合は、施用後灌水してください。

(3) 摘葉

果菜類は、生育後半を迎え、葉が込み合ってくる時期です。きゅうりでは、込み合った葉を除去し果実や子枝・孫枝に光を当ててください。1回の摘葉は2枚程度としてください。

2 こんにやく

(1) 追肥

7月下旬から新芋の生育期に入ります。8月上旬までに尿素を1～1.5kg/a施用してください。

(2) 病害虫防除

こんにやくは、病気に弱いため早期発見・早期防除をするよう心がけてください。高温期には多湿条件で葉枯病・腐敗病の発生が助長されますので、多灌水は控え、排水対策も十分行ってください。降雨の後や病気にかった葉を取り除いた後に、ICボルドー66D(40倍)等を散布してください。

なお、薬剤散布は朝夕の涼しい時間帯に行ってください。 <土居>

【栗】

1 除草管理

栗は、夏期に乾燥すると果実の肥大が悪くなります。草刈りや敷き草等により乾燥を防ぎましょう。

2 収穫

高温期の収穫は遅れると乾燥によるしなび果や炭そ病被害果の発生が多くなります。果実品質の低下を防ぐために毎日、朝・夕に収穫するようにしましょう。

また、収穫の省力化を図るため収穫ネットの導入も考えてください。

3 病害虫防除

収穫時のモモノゴマダラメイガの発生は、果実の商品性を著しく低下させます。

早生種は8月上～中旬から、中晩生種は8月下～9月上旬から防除を行います。薬剤はエルサン乳剤1,000倍を散布してください。

<可部>

【シキミ】

1 病害虫防除

高温期に多発する病害虫の適期防除を徹底し、お彼岸出荷に備えます。防除は高温時を避けて涼しい時間帯に実施し、薬剤が葉裏にかかるよう、丁寧に散布してください。

農薬名	適用病害虫	散布濃度	使用時期/使用回数
コテツフロアブル	クスアアキゾウムシ	2,000倍	発生初期/2回以内
モスピラン顆粒水溶剤	グンバイムシ類	2,000倍	発生初期/5回以内
ピラニカEW	サビダニ類	1,000倍	発生初期/2回以内
スタークル顆粒水溶剤	ケムシ類	2,000倍	発生初期/5回以内
トップジンM水和剤	うどんこ病、炭疽病、輪紋葉枯病	1,000倍	発病初期/5回以内

2 下枝の整理

株元の古枝や細い下枝が込み合ってくると、病害が蔓延したり、防除作業がやりにくくなったりします。また、収穫枝の伸張が悪くなるので、適宜切除して風通しを良くしてください。

3 荷造り

採取した切り枝は、病害葉や古葉、実などを取り除き、出荷先の規格に合わせて、輪ゴムや紐で元を揃えて束ね、日陰で10時間以上、水揚げをしてください。 <佐津間>

【茶】

1 土壌改良

茶園土壌の適正pHは4～5です。強酸性になっている茶園では、肥料成分が吸収しにくい状態になっています。このため、8月中旬頃に石灰資材を120～150kg/10a施用して深耕し、pHを矯正します。

なお、鉍物質である苦土石灰等を多用すると土壌が硬くなる可能性がありますので、動物系のカキ殻石灰などを利用すれば、秋肥と同時に施用できます。

2 深耕

茶園のうね間は摘採や管理のため踏み固められ、土壌物理性が悪くなっています。深耕を行い、通気性の改善と吸収根の再生を促します。

作業は通常、新根の発生が旺盛になる前(8月中下旬)、石灰資材施用後に行います。時期が遅れると切断した根が回復せず、かえって地上部の生育が抑制されますので注意してください。

3 秋肥

茶樹にとって秋肥は、翌年の一番茶の品質を左右する重要な肥料です。石灰資材施用後2週間(8月下旬)に第1回目の秋肥を施用します。施用量は、窒素成分で14kg/10a(えひめ茶有機100では10袋、えひめ茶有機グリーン1号では7袋)を施用し、土と混和してください。

<中田>